

「ダム湖におけるウチダザリガニ駆除及び上下流部における
ニホンザリガニの保全に関する研究」

研究代表者 パシフィックコンサルタンツ
山田浩行

1. 目的

ウチダザリガニは特定外来生物に指定されているものの日本各地に分布が拡大しており、その分布の中心である北海道では、特にダム湖が主な分布域となり、ニホンザリガニを始めとした当該水系の希少な在来生物に悪影響を与えていることが懸念されている。そのためダム湖において本種の管理をする技術の確立に資する情報を得る。

2. 方法

湖面が凍らず、しかも水位変動が最も激しい時期である夏から初冬にかけて合計3回の籠による採集と潜水調査を並行して行った。場所は予備調査により、最も典型的なダム湖とされた北海道東部にある鹿の子ダムで、湖岸3定点（主な流入河川の河口部付近と放水口付近と両者の中間地点）と流入河川数地点を設けた。潜水調査はウチダザリガニの採集と水深+底質の記録を行った。

3. 成果

放水口近くと主な流入河川の河口付近ではウチダザリガニの密度が極めて高く、それとは正反対に両者の中間地点では本種がほとんど見られなかった。なお前者の底質は砂礫で転石が点在し、後者では転石等の隠れ場所が見られず底質は人工的に敷設された砂であった。また流入河川では一定の流速あり、また堰等の人工の構築物がある流入河川の上流部ではウチダザリガニは見られず、ニホンザリガニが採集されることがあった。この傾向は3回の調査で一致していた。

4. 今後の展望

湖岸においては砂の敷設やウチダザリガニの隠れ場所となる人工護岸の間隙部を無くすことでその環境収容力を低減させ、結果として本種の密度抑制技術に展開することが考えられる。また流入河川では流速の制御や人工的な堰により、湖岸からのウチダザリガニの侵入を防止できる可能性も示唆された。ただし人工的に水系の環境を改変して外来種だけが悪影響を受ける生態系管理の実施は予測が不能な面もあり難しいと思われ、今後の展開に当たっては慎重な対応や協議が望まれる。